

(様式4)

学 位 論 文 の 内 容 の 要 旨

氏 名 豊島 幸子 印

(学位論文のタイトル)

Seroprevalence of measles and rubella antibodies and the effects of health education in high school students evaluated using antibody titer measurements

(高校生における麻疹・風疹抗体保有状況と教育効果)

(学位論文の要旨)

厚生労働省は麻疹ゼロを目指して排除に向けた取り組みを行っているが根絶されておらず、予防接種の理解が求められている。そこで、本研究は高校生の麻疹・風疹抗体保有率を把握し、感染症と免疫に関する健康教育の効果を分析することを目的とした。

2008年および2010年にG県にあるS高校に在籍した生徒1,155人を対象とし、麻疹・風疹抗体価測定を希望した563人について抗体保有率を調べたところ、麻疹は83.5%、風疹は80.4%が陽性であった。WHOは麻疹根絶のためには抗体保有率が95%以上であることが望ましいとしており、今回の結果は目標値に到達していなかった。また、対象者1,155人に対して、感染症に関する健康教育「感染と免疫の基礎的知識」を行い、健康教育前後で同一のアンケート調査を行った。健康教育実施時に抗体価測定結果を返却し、結果の見方の説明を行った。5項目から成るアンケート調査の全員の平均点(5点満点)は、健康教育後に3.38点から4.29点に増加し($p < 0.0001$)、抗体価測定実施群(563人)、未実施群(358人)、抗体価測定希望調査を行わなかった対照群(234人)の平均点は、それぞれ、1.14、0.72、0.64点増加した。抗体価測定実施群では、基礎的な免疫の知識に関するすべての項目で理解度が高まり、未実施群と比較し改善の割合が有意に高かった。一方、抗体価に関する項目では、未実施群の方が対照群よりも理解度の割合が高かった。その理由としては、実施群の人に抗体価測定の結果を返却した際、同席して抗体価についての説明を聞いていたことが理解の向上につながったと考えられた。しかし、抗体価測定を希望した人は健康に対する意識が高く、感染症に対し、関心をもっていることが考えられる。従って、抗体価測定を実施したため教育効果が高かったのか、もともと感染症に対する意識が高いため教育効果が上昇したのかを区別するのは難しいと考えられた。

抗体価測定結果を科学的エビデンスとして教材の一部に取り入れて健康教育を行った結果、教育効果が高まり有用であった。また、自分自身の抗体保有状況を知ることが強い動機づけとなり、高等学校指導要領に示されている健康教育目標「生涯を通じて自らの健康を適切に管理し、改善していく資質や能力を育てる」に貢献できたと考えられる。感染と免疫の基礎的知識と予防接種の理解は、将来の自分の健康的な生活の基盤となり、自分を守ると共に感染の伝播を防ぎ、感染症の制御につながる。今回の調査で理解度が低かった33名(2.9%)の知識・理解を高めていくことが課題である。